

# 平成 30 年度学校評価結果報告書

(年度末評価)



広島県立福山葦陽高等学校

(定時制課程)

# 目 次

## 1 自己評価結果

(1) 平成 30 年度自己評価シート (年度末評価) . . . . . 3

(2) 平成 30 年度自己評価シート (年度末評価まとめ) . . . . . 7

## 2 学校関係者評価結果

(1) 平成 30 年度学校関係者評価シート (年度末評価) . . . . . 8

平成30年度自己評価シート(年度末評価)

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	小林泰崇	全・定・通	本・分
----	----	-----	--------------	------	------	-------	-----

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度 実績値	本年度		評価	理由	担当 部等
			目標値	実績値			
1 考え抜く力の育成							
1) 基礎学力の定着を図る中で、学んだ知識を活用しながら主体的に問題を解決していく力	a) 定期考査における基礎力定着問題の通過率(国・数・英)	新規	50%	国語 69%, 数学 57%, 外国語 66%	A	いずれも1年次生の数値である。中学校からの学び直しを行った成果が出ている。この力が活用いどのようにつながっているのかを検証する必要がある。	教務部
	b) 定期考査における活用問題の通過率(国・数・英)	新規	40%	国語 64%, 数学 57%, 外国語 30%	B	外国語の数値は目標を下回ったが、学び直しと知識の活用の両方に取り組んだ結果として重要な数値である。	教務部
2) 学んだことを自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、粘り強く学び続ける力	c) 自己の将来を見据えた検定試験受検者数(新たな級や新たな資格にチャレンジする生徒の数)	新規	30人	18人	C	数値が目標に達していないためCとした。受検者の内訳は英語検定7名、情報検定11名である。	教務部 進路指導部
	d) 卒業年次の進路実現率	新規	100%	94.7%	B	卒業予定者19名中、現在18名の進路が決定している。 ・専門学校 12名 ・就職 6名 一次的就労を希望している1名は、就職活動を継続中である。	進路指導部

【評価結果の分析】

a) 基礎・基本の定着については一定の成果があった。国語は漢字検定3級(中学校卒業程度)の漢字の読み書きを課している。数学は計算問題、英語は、アルファベットの学び直しからクラスルームイングリッシュを定着させるところまで指導を行った。数学と英語は積み重ねが重要な教科であるため、短期間で成果が出るものではないが、身に付けた基礎力が活用いどのようにつなげ、どうつながっているのかを明らかにしていく必要があると考える。また、粘り強く学習に向かう態度を指導して行くことが大切である。

b) 外国語の活用問題通過率は一学期より低下しているが、授業と考査の難易度が上がっていることが理由である。出題されたテーマによって生徒の得意不得意もあり、中学の時から英語を不得意としている生徒が多いこともその一因である。しかし、年度初めはアルファベットを学び直すところからスタートした中で、3割の生徒が解答の条件を踏まえて何がしかの英作文を書くことができるようになった。国語の活用問題は最初にモデルを示し、身の回りの問題について考えさせて表現させた。SNSに熱中する若者の心理について述べた回答も見られ、無答率も下がった。

c) 数値は目標に達しなかったが、情報検定受検者のうち6名が1年次生であること、昨年度は2年次生が受検した表計算を今年度は1年次生から受検していることは資格に対する意欲の向上と考える。受検者11名のうち合格者は8名である(2名が結果待ち)。英語検定受検者は延べ7名で、6名が合格している。うち2名が2年次生で、3名が1年次生である。2学期から放課後個別指導を受けるなど自主的に学習に励んできた。また、4年次生1名が英語検定2級に合格している。今後も高い目標を持たせる取組を組織として行っていく必要がある。

d) 卒業予定者19名の内、18名が進路を決定している。すでに進路決定している生徒には、夏季進路指導へ参加し早期からの取り組みや準備ができた生徒が多い。専門学校等への進学を希望する生徒も一定数おり、就職とあわせて希望進路の実現に向けて、今後も組織的な取組を展開していきたい。課題としては、昨年までは年内に多くの生徒が進路決定をしたが、今年度は、身体的な事由により慎重な取り組みを要するケースや出席状況が十分でない等の理由から、早期から出願ができないケースもあった。不登校傾向のある生徒の進路指導に課題が残った。

**【今後の改善方策】**

a) 基礎・基本の定着のためのドリル学習は授業始めの集中力を高めることに役立っている。ドリル学習の内容を一定の割合で考査に出題することは、反復学習は得意だが活用問題が苦手という生徒の得点源にもなっていることから今後も継続していく。しかし、単なる作業に終わらせず達成感と評価への安心感につながるものとして取り入れていく。今後は活用問題と連続したものとなるよう工夫し、考査問題の質の向上につなげていきたい。また、授業における視覚的な支援をはじめとした様々な支援に係る取組を工夫していく必要がある。

b) 活用問題を全教科で出題し、結果を分析して授業づくりに生かす取り組みも3年目となった。各教科が出題を工夫し、生徒にとって自己の将来を考えさせるものから現代社会の課題までテーマは多岐にわたる。正答でなくても試行錯誤しながら記述する様子も見られ、活用問題に取り組みもうとする意欲は向上している。書いたり話したりすることで、自分を表現する力は、社会の中で増々求められるようになる。活用問題を通して表現する力の育成に努めていく必要がある。一方、無回答の生徒が固定化しており、少数を生かしたきめ細かい指導で「できる」実感を持たせる取り組みを粘り強く続けていきたい。

c) 定時制生徒が最も苦手とする英語の検定試験に挑戦する生徒が増えていることは大きな成果である。英語検定2級に合格した4年次生は専門学校への進学を控えており、高資格取得によって授業料の減免を受けることができた。後輩たちにとっての良いモデルにもなっている。経済的に厳しい状況の生徒が多い中で、進路希望を叶える一つの方法として資格取得に向けた情報提供と指導を続けていく。

d) 年度末までに全員の進路決定が実現するよう、粘り強い取り組みを継続していく。不登校傾向のある生徒については出席状況だけでなくコミュニケーション能力、自己の進路を描いていくキャリア形成能力の育成が十分にできていないことなどが課題となった。個々のキャリア形成能力を分析し、低学年次からの発達支援について検討をしていく必要がある。全体としては、生徒の学校への定着、保護者への情報提供、連携の強化が課題である。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当部等
		実績値	目標値	実績値			
2 前に踏み出す力の育成							
3) 周りの人との関わり合いを通して、社会性を身に付け、自らの進路を切り開いていくことができる力	e 自ら進んで毎日挨拶をすることができる生徒の割合)	新規	80%	89%	A	挨拶向上実績度数は、目標値をクリアしている。	生徒指導部
	f) 月間遅刻者数が1以下の生徒の割合(年間11以下)	20%	25%	23%	B	月間遅刻数が1以下の生徒は目標値をクリアしていないが、前年度からは3%増加している。	
	g) 前年度の問題行動の発生件数と比較した減少率	新規	5%	10%増	C	問題行動の発生件数は10%増加している。	

**【評価結果の分析】**

e) 「挨拶向上実績度数アンケート」において、「挨拶をしている」と答えた生徒の割合は89%であり、目標値を上回った。挨拶をする生徒が増加していることが伺えるが、あらゆる場面で誰に対しても気持ち良く挨拶ができるようになるには課題が残る。近隣住民に迷惑をかけることとあわせて挨拶の質の向上を図っていく必要がある。

f) 月刊遅刻数が1以下(4ヶ月で4以下)の生徒の割合は23%であった。目標値である25%よりも2%下回った。昨年度は20%であり、昨年度と比較すると3%増加している。加えて、遅刻をしなくなる生徒が固定化している。

g) 前年度の問題行動発生件数は88件であり、今年度は、97件であった。10%増加している結果となった。校外巡視の範囲を拡大し、校内巡視を丁寧を実施することによって、問題行動を認知する件数が増加したと考える。更なる課題として、同じ生徒が問題行動を繰り返す傾向がみられ、再発を防ぐ指導の在り方を工夫していく必要がある。

**【今後の改善方策】**

e) 今後も、自発的に挨拶ができるように指導していく必要がある。挨拶を苦手としている生徒に対しても、校舎内外で教員から積極的に挨拶をし、範を示すことが効果的と考える。

f) 下足箱の使い方やマナーが改善しつつある。しかし、社会性を身に付けるためには、きちんと毎日遅刻をせず、生活習慣を整えさせる必要がある。欠課時数が多くなっている生徒も増えているため、朝のSHRから出席をし、すべての授業に出席をするよう促していく。

g) 問題行動発生件数は、昨年度より増加しているが、校外で喫煙をする生徒の指導回数が増えるなど、積極的な生徒指導を実施している。校外での喫煙行為を指導することにより、地域住民からの苦情は減少した。また、今年度は、指導の内容を理解できない生徒が見受けられた。どのような行為が問題行動なのか、どのような指導が実施されるのか等、図化することで視覚的な支援を行った。今後も、特別な配慮を必要とする生徒が増加することも考えられるため、ルールを理解しやすいような提示方法を工夫していく必要がある。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当 部等
		実績値	目標値	実績値			
3 チームで働く力の育成							
4) 「体験的な学び」を通して、社会的な視野を広げるとともに、他者と協働して課題に取り組んでいくことができる力	h) 学校行事に対する満足度（+生徒の具体的な変容）	86%	90%	84%	B	学校生活アンケートによる学校行事への満足度84% 行事後のアンケート ・球技大会：85.9% ・運動会：90.4% 運動会では、生徒（特に高学年）が出場種目決めて進行や道具係を行うなど、主体的に参加している様子が伺えた。	保健美化部
	i) 「体験的な学び」を通して、社会的な視野が広がった生徒の割合	86%	90%	100%	B	修学旅行満足度アンケート及び2年次生の県立博物館見学のアンケート結果によると、総じて肯定的反応であった。対象生徒が限定的であるためBとした。	教務部 生徒指導部
	j) 各種ボランティア活動等への参加率（校外清掃への参加を含む）	70%	80%	62.3%	C	毎月1回LHRで、または考査前、行事前に清掃活動を実施し、教室以外の場所（トイレや廊下、昇降口、特別教室）の清掃にも取り組んでいる。美化活動への関心を高めることや責任感、達成感、自己有用感を得られる場面を作っている。	保健美化部 進路指導部

#### 【評価結果の分析】

h) 学校生活アンケートでは、学校行事の満足度は84%であった。球技大会、運動会後に実施したアンケートでは、肯定的な回答が85.9%・90.4%であった。クラスメイトと協力してプレーをしたり、声をかけあったりしており、生きいきとした表情をしている生徒が多かった。また、運動会では、高学年の生徒が中心となり、学年縦割りチーム内で声をかけあったり、競技道具の準備・片づけ等を積極的に行ったり、主体的に行事へ参加している様子が伺えた。保護者にも参加して頂き、競技や昼食調理を共にすることで、生徒と保護者の交流を深めることができた。

i) 修学旅行満足度アンケートによる数値を挙げた。自由記述に「チームワークが良かったこと」「一般の方のことを考えて行動できた」を成果として挙げており、社会体験を積み、公共の場でのマナーを学ぶという目的が一定程度達成することができたことを生徒自身が実感していた。対象生徒が限定的であったことからB評価とした。

j) 毎月1回LHRで、または考査前、行事前に清掃活動を実施している。教室以外の場所（トイレや廊下、昇降口、特別教室）も生徒は清掃に取り組んでいる。生徒全員で清掃活動の時間を設定し、日常的に校舎内外の美化を生徒に呼びかけることで、美化活動への関心・意欲の向上につなげている。2月21日には校外清掃活動を実施し、校内に限らず地域の美化活動にも関心を高める機会を設定した。また、豪雨災害を経験しボランティアについて考える機会を得、被災家庭用の雑巾づくりに取り組んだ。

#### 【今後の改善方策】

h) より生徒主体の行事となるよう、生徒会執行部を中心に行事準備計画を立てさせ、競技前に生徒たちが練習できる場を設定するなど、行事前から生徒全体が盛り上がる雰囲気づくりを行う。行事当日に限らず、行事の運営（準備から行事後まで）を通して、生徒同士が関わり合い、達成感や自己有用感を高められる行事設計をしていく必要がある。

i) 体験学習後はレポートや発表資料へのまとめ、進路講演会で全体発表を行うことで学習成果を形に残し、次年度実施予定の学年に対する意識付けを行っている。参加人数が少ないためデータとしては不十分であるが、生徒のまとめや感想から個々の生徒の変容を見ることが出来る。博物館見学は教科横断・総合的な授業の取り組みであると同時に、次年度入学生が履修する「国語表現」「日本史B」の予備学習として今年度初めて実施する。生徒の変容を丁寧に追跡し、少人数ならではの授業展開ができるよう指導の在り方について検討中である。

j) 引き続き、清掃活動から生徒の美化意識や自己有用感・ボランティア活動への関心、意欲を高めるとともに、ごみの分別等の環境へも意識・視野を徐々に広げられるような清掃活動の計画を立てるとともに、清掃活動では教職員が範を示し積極的に指導していく。実際のボランティアについては、具体的な行動に移すことは難しいが、ボランティア精神や他者から学ぶことも多くあったのではないかと考える。今後は、教材化等も考えていく必要がある。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当 部等
		実績値	目標値	実績値			
4 働き方改革							
5) 業務改善の取組を進め、職員の在校時間を縮減する。	k) 職員の勤務時間外の平均(月)	36 時間	33 時間	22 時間	A	昨年4月から本年1月までの平均が 22 時間で、目標値はクリアしている。	校務運営 会議
	1) 業務改善の取組について、学校全体で取り組んでいる(肯定的評価)	58.3%	65%	60%	B	課題を抱える生徒が多いことに加え、教職員数が限られていることもあり、一部教職員に負担が偏っていることも考えられる。目標値に達することができなかったためB評価とした。	校務運営 会議

**【評価結果の分析】**

k) 勤務時間管理システムへの入力を通して時間管理意識が定着してきているのではないかと考えられる。また、定時退校日だけではなく日常的にも早めの帰宅を促すように呼びかけることで、勤務時間に対する意識化が図られていると考える。

1) 日常的に情報の共有化を図るとともに、協働的に業務を行う雰囲気づくりに努めてきた。定時制は小規模であるがゆえに、協働的に業務を行わざるを得ない面もある。一人一人の責任と分担すべき業務も必然的に多くなるが、お互いに足りない部分をカバーしながら教育活動に当たっている。

**【今後の改善方策】**

k) 定時退校日はもちろんであるが、日常的にも早めの帰宅を促す呼びかけを積極的に行っていく。加えて、様々な業務を一人で抱え込むのではなく、協働的に業務を行っていく職場の雰囲気を醸成していくことが、長時間勤務の縮減にもつながると考える。

1) 組織にとって情報は血液と同じで、全教職員で同じ情報を共有化していることが重要であると考え。そのために、今後も校務運営会議やその後の連絡会での情報の共有化を軸にしながら、日常的に教職員間で情報の共有化が図られるように継続的に取り組んでいく。

## 平成 30 年度自己評価シート（年度末評価まとめ）

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	小林泰崇	全・定・通	本・分
----	----	-----	--------------	------	------	-------	-----

## 1 評価結果の分析と改善方策

## ■ 考え抜く力の育成

## ○基礎学力の定着と活用力の育成

・基礎・基本の定着については一定の成果があったと考えられる。今後は、その力を活用して課題を解決していける段階にまで高めていかなければならない。そのために、どの教科も定期考査の中に活用問題を位置付けている。しかし、無解答の生徒もいることから、基礎・基本の内容を活用問題に結びつけた授業展開となるように工夫していく必要がある。何よりも、真面目に粘り強く学習に向う態度の育成に向けて丁寧に指導を継続していくことが大切である。

## ○学習意欲の向上

・各種検定試験において、新たな級や資格に挑戦する生徒の数を指標として取り組んできたが、目標値に達することができなかった。一方で、英語検定試験では合格者を増やすなど丁寧な個別指導による成果もでている。各種検定試験についての情報提供や、検定試験の内容を授業内容と関連させた指導をさらに工夫していく必要がある。各種検定試験への呼びかけは、将来のキャリア設計と関連付けて行う必要がある。

・卒業予定者の進路実現に向けては、組織として取組を進めてきた。進路決定にこぎ着けた生徒の多くが、夏季進路指導に参加するなど早期からの取組や準備ができていた。このことから、卒業前年度からの意識づけと準備をさせる取組が必要がある。就職とあわせて、専門学校等への進学を希望する生徒も少なからずいるため、その進路希望を実現するための組織的な取組をさらに展開していかなければならない。

## ■ 前に踏み出す力の育成

## ○他者との関わりを通した社会性の育成

・アンケートにおいては、自ら進んで挨拶をしている生徒の割合は目標値をクリアしているものの、あらゆる場面で誰に対しても気持ちよく挨拶ができていないかといえ、必ずしもそうなっているわけではない。近隣住民に日常的に迷惑をかけないことと併せて、挨拶の質の向上を図っていく必要がある。そのためにも、教職員が率先して範を示していく。

・遅刻者数については、遅刻してくる生徒が固定化している。家庭との連携も含めて、個々の生徒への指導を丁寧に継続していくとともに、日常的なクラスでの呼びかけを行っていく。

・問題行動の発生件数は昨年度に比べて 10%増加している。これは、校外巡視の範囲を拡大し、より丁寧に巡視を行うことで、問題の認知件数が増加したことも関係していると考えられる。更なる課題として、同じ生徒が問題行動を繰り返し行う傾向がみられるようになった。再発を防ぐ指導の在り方を考えていく必要がある。

## ■ チームで働く力の育成

## ○体験的な学びを通した協働性の育成

・学校生活アンケートでは、学校行事の満足度は 84%であった。球技大会や運動会後のアンケートでも肯定的な回答が高い数値を示していた。行事では、日頃は見ることができない生徒の生き生きとした表情を見ることができた。また、他者と協働して行事に取り組む姿も数多く見ることができた。様々な学校行事が、生徒の社会性の育成につながっているのではないかと考えられる。一方で、行事の中での後片付けや、観戦のマナーについて指導が必要である。

・今年度はテーブルマナー講座は実施できなかったが、修学旅行や 2 年次三修制生徒による県立博物館見学などの評価は高かった。定時制の生徒にとって「体験的な学び」を通して、社会的な視野を広げることはとても重要である。校外における体験的な学びの機会を更に増やすとともに、対象生徒を広げていく必要がある。

・身の回りの整理整頓や美化活動を通して、他者への配慮や社会貢献の意識を高めていく指導が必要である。毎月 1 回の清掃活動だけでなく、日常的に周囲の環境美化に取り組むように、教職員の声かけや指導が必要である。

## ■ 働き方改革

## ○業務改善の取組

・時間外勤務時間の平均は 22 時間で、目標値に達している。定時退校日や早めの帰宅を促す呼びかけを引き続き行っていく。教職員間での情報の共有化を図り、協働的に業務に当たることによって業務改善が図られていると考えられる。

## 2 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策

○目標設定に当たっては、生徒の実態をしっかりと把握し課題を明らかにした上で、適切に行わなくてはならない。相対的に評価することも必要ではあるが、生徒等の実態に即した絶対的な評価指標を設定する必要がある。

○問題行動発生件数が増加傾向にあり、保護者との連携はもちろんであるが、警察等の外部団体との連携も丁寧にやっていく必要がある。そして、教職員全体で課題意識を共有しながら、組織的な取組を継続していくことが何よりも大切である。

## 平成30年度学校関係者評価シート(年度末評価)

平成31年3月31日

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	小林 泰崇	全(定)通	(本)分
----	----	-----	--------------	------	-------	-------	------

評価項目	評価	理由・意見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「基礎力定着問題の通過率」の評価指標で、国語は漢検3級の漢字の読み書きで実績値69%となって、判断材料になるが、数学の計算問題の内容や英語のクラスルームイングリッシュの定着というのは、求める基礎学力の程度が分かりにくい。</li> <li>・学校経営計画に基づき、目標、指標、計画が有機的に関連づけられ、概ね適切な設定となっていました。特に、基礎学力と活用力の育成を目指すため、新規に定期考査の基礎力定着問題、活用問題(国・数・英)それぞれの通過率を指標とし、その目標値についても適切に設定されていました。</li> </ul>
目標の達成状況の評価の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な問題を抱えた生徒がいる学校なので、「職員の勤務時間外の月平均が22時間」というのは、特に問題のない時間ではないだろうか。0にはならないと思います。</li> <li>・業務改善の取組について、今回は集計結果の発表前のために記載されていないとのことだが、業務改善モデルアンケートというのはどんなものか興味があります。</li> <li>・個々の計画における具体が明示され、達成状況に関して概ね適切な評価がなされていました。</li> </ul>
目標達成に向けた取組みの適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「自ら進んで毎日挨拶をすることのできる生徒の割合」が、89%と目標を上回っていて良い傾向だと思うが、具体的な指導方法や取組みについて記載していただきたい。</li> <li>・目標達成に向けた取組は、概ね適切になされていました。成果が得られた事項、課題のある事項について整理し、次年度の実効性のある取組を期待します。</li> </ul>
評価結果の分析の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題行動発生件数が97件で、前年度+9(10%増)とあるが、主な内容はどのような問題行動なのでしょう。学校の規則違反を超えた法律に反することであれば、警察や外部団体との連携も必要なのではないでしょうか。</li> <li>・各項目の評価に対し、具体的な事実に基づき、現状と課題が明示され、次年度につながる概ね適切な分析内容でした。</li> </ul>
今後の改善方策の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒指導の内容を理解できない生徒に対して、何が問題行動であり、どのような指導をするのかを図化することで視覚的な支援を行ったとのことですが、これは一部の生徒とは思いますが、そのような状況に驚くと共に、支援の内容について教えていただきたいと思います。</li> <li>・個々の評価結果の分析に対応した改善方策が提示され、概ね適切でないようでした。</li> </ul>
総合評価	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年度に、海外短期留学に参加して全国レベルの英作文コンテスト入選を果たした4年生が、英検2級に合格したことは、大々的にPRしても良いのではないのでしょうか。働きながら頑張った本人の努力の結果でしょうが、当然のことながら、学校としての支えがなければ取れない資格だと思います。授業料減免のある専門学校に進学して、さらなるスキルアップを目指すようですが、長い将来を見据えたとき、経済的な事情が大きいかとは思いますが、大学という選択肢もあったのではと考えてしまいます。生徒指導上の問題も多い生徒達の中で、このことは先生方にとって、様々な取組みに対して自信が持てる快挙だと思います。</li> <li>・個々の生徒に対応した取組とともに、定時制ならではの学年横断的な取組を行うことにより教育効果があがっているように思います。特に、生徒情報が共有され、組織的、機動的な取組がうかがえる内容であり、英検2級の取得者が出ていることは大きな成果であると思います。次年度に向け定時制教育の更なる充実を期待します。</li> </ul>